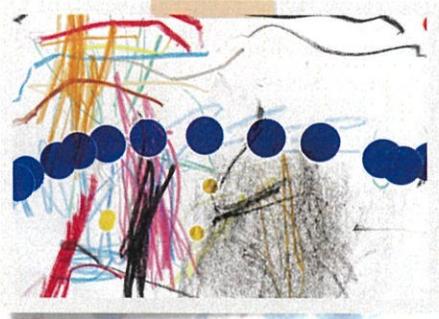


子どもたちの作品集



麻布乳児院だより 第2号

令和3年8月31日発行

発行：麻布乳児院 東京都港区南麻布5-1-20

編集・印刷：勝田印刷株式会社

デザイン：牛木良

広報8月31日 第2号

麻布乳児院

Azabu infant home だより

わたしたちの「理念」

- 個性の尊重
- 心身の健全な発達促進
- 家族や地域社会との連携

〒106-0047
東京都港区南麻布5丁目1番20号

大きくなったね



生後1ヶ月のときの足型
実物大



3歳のときの足型
実物大

主な記事

- 1 子どもの声
- 2 養育者の視点から気づくこと
- 3 乳児院を利用すること
- 4 ボランティアの方への感謝
- 5 院長挨拶
- 6 編集後記

広報誌「麻布乳児院だより」では、社会的養護の元にいる子どもの声をお届けすることを主眼としています。社会の一員として、ともに子どもの声に耳を傾け、一緒に考えていきたいと思ひます。

子どもの様子と子どもの声



「安心するミルクの時間」

子どもの様子

生後5か月を迎えたAちゃん。生後3か月の頃からミルクの飲みムラが出てきました。ダンゴ室の養育者は、毎日試行錯誤しながらのミルク時間。そんな中、少しウトウトしている時の方がより飲める、ミルクの温度は温かい方がより飲める、などなど少しずつAちゃんに合ったタイミングや飲み方を見つけていきました。最近では少しずつ飲めるようになってきて、お部屋にある鏡を見たり、養育者の指をギョギョッと握ったりしながら飲むことが出来るようになりました。養育者一同、ホッと安心！（大迫）

0歳の乳児の声

Aちゃん：あ～おなかすいたなあ。だけど、今はあまり飲みたくないなあ～ん、ミルクのにおいがする。わたしのミルクかな？
（飲まずに体を反らさながら）んー!! おくちのところがかたいなああ～、やわらかいのがいいのになあ～



「おともだちといっしょに」

子どもの様子

いつも一緒になって近くで遊んでいる、仲良しの男の子2人組。お互い「ん、ん！」と言いながら、壁に貼ってある写真や絵を指さし、「Bくんも同じのを見てよ!」と声を掛け合っている雰囲気。隣り合ってニコニコして見た後に、またすぐ別の場所で同じようなやり取り。お互いの発見を共有して「いっしょに」楽しんでいる様子です。（滝川）

1歳の子どもの声

Bくん：「あ、あ、パンダ、パンダ！（みてみて!）」
Cくん：「あ、パンダ！（こっちもあるよ）」
Bくん：「あ、パンダ、あった。（そっちもあったね）。
（見て、こっちもあるよ）」（一緒に見ると楽しいな）

「すこし特別なおやつ時間」

子どもの様子

同じスノーピーのお部屋で仲良しな、2歳の4人のお友達。いつもはダイニングでおやつを食べますが、この日はとってもいいお天気!八重桜が見える窓のそばに机を持って来て、4人全員でおやつを食べました。お昼寝後のおやつ時間ですが、いつもに増して話も弾みます。麻布乳児院では、子どもたちが安定して日々の生活を送れるように日々考えています。そんな中、工夫次第で少し特別な気持ちになり、より楽しく過ごせるという事を、4人の姿から学びました。（竹本）

2歳の子どもの声

4人それぞれの実際の声：
「あったかい」「ピンクのお花いっぱい!」「（おやつの後）おそと行きたいね」（いつもとちょっと違って、わくわくするなあ!）（ぼかぼかして、おひさまが気持ちいい）



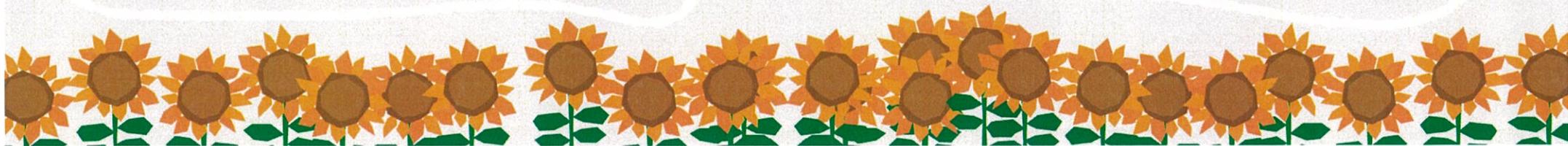
「お世話焼きな優しいDくん」

子どもの様子

3歳になったばかりのDくん、お部屋にある沢山のぬいぐるみ相手に懸命にお世話をします。ご飯やお茶を振舞ったり、「お熱出ちゃったの?」とおでこに冷えピタを貼ったり、「お熱なんです。先生治してください」と病院に連れて行ったり等看病をし、「お買い物行こう」と買い物かごをぶら下げて出掛けたりしています。この日は、ぬいぐるみを寝かせて、それぞれにお布団を掛けて、更には優しくトントンしてくれます。その様子は、普段乳児院職員がDくんに行っている姿そのもの。ぬいぐるみに対するDくんの優しい姿に成長を感じることが出来ました。（小林）

3歳の子どもの声

Dくん：ねんねの時間ですよ～。お布団かけて、...、よいしょ、よいしょ。ちゃんとみんなにお布団かかっているかな?起さないようにしなきゃ。優しく、優しく（トントン）



養育者の視点から気づくこと

お便り第2号は、家庭支援専門相談員から見た、乳幼児に関わる「養育者」の特徴について、4つの事例を取り上げました。言葉を話さない子どもとその親、乳児院で日々お世話を行う養育者。そこでは、どのようなことが起こり、どのような思いがあるのでしょうか。

予 想外の妊娠で育てられないと決断した母からその子が来た時に衣類と共にぬいぐるみを預かりました。私たちはお母さんに会ったことがありません。愛情としての決断を感じながら養育に励み、養親となる新しい家庭へと移りました。

新生児のその子の健やかな姿を見ながら養育者は母がどんなに育てたかったらうかと想像し、涙がでました。預かった物は将来その子に渡すために大切にしました。自分の想いだけで無理をせず、状況を冷静に判断することは簡単にできることはありません。子どもに安定したよりよい時間を過ごして欲しいと別の家庭に託すことは子どもを捨てることになるのでしょうか。切ない思いをしながら選んできたであろう物から愛情があることがわかりました。乳児院でも新しい家庭を探している間にかわいがられてきました。養親もその子との出会いを心から喜び、子育てに奮闘しています。人が変わっても生まれたときからずっと周りの大人にその子は愛情を注がれていることになり、早いうちから自分の生い立ちについて伝えていき、愛情として本人に伝えることが最終的な目標です。

障 害や病気の判別がつきにくく、社会生活が難しい母と発達に課題がある子。積極的な関わりが乏しく、母は養育ができないと周囲の関係者から懸念されました。状態の安定を確認した後、交流を重ねて安全を確認し、地域支援を受けながら家庭で暮らすことになりました。

面会、外出を通して親子の様子を見た養育者は「何の問題もないです」と言いました。似ている二人の間には言葉はほとんどありません。お散歩で手を繋いで歩いていると疲れたその子はしゃがんで動かなくなりました。お母さんは黙って同じようにしゃがみ、その子が背中にくっつく立ち上がりおんぶする形になり、歩き始めました。その子の社会性のためには言葉での関わりも当然必要です。しかしお母さんのような関わりは他人には決してできません。人と違う特性を持ったその子がこれから成長していくにあたってお母さんが誰よりも味方でいてくれるように感じました。一般的な子育てに当てはめると出来ないことが目立ちますが乳児院での大人への評価は子どもとの関わりが全てです。子どもと向き合っているか、可愛がっているか、興味関心があるかを重視しており、できる、出来ないは練習や支援体制で安全な環境に近づけることができます。

乳児院では
コミュニケーションの主流は言葉ではありません

ん。水から出てきたばかりの子どもたちは周りからのあらゆる

刺激を感じて応答が始まります。受け取ろうとする養育者の観察力は

特殊能力ともいえるものがあります。直接的な表現や接している時間以外

のことも含めて気持ちを感じています。大人だから親だからと求められることも多

いですが、乳児院では目標を明確にしていながら専門職がその人にできる形で

の表現を受取り、子どもに直接関わる大人に伝えるように仲介をしています。そう

することで子どもが大人からの愛情をいろいろな形で受けられるように努めてい

ます。誰も赤ちゃんだったので、時代の大きな転換期である今こ

のときに子どもが生活しやすい世の中について考えることが大人自

身を支えることに繋がるのではないかと思います。

(家庭支援 志村)

事 情により少し面会の間隔が空いてしまい、1歳のわが子に人見知りやされるのではと緊張しながら来た保護者。以前は穏やかな時間が過ぎていたのに、成長も伴って人見知りが始まり、大泣きになって養育者にしがみつきます。

養育者は「他の人が近づくと泣くことはあるけれど顔を見ただけで泣いたのでママのことが分かっているのだと思う。」と言いました。交代勤務ですが24時間子どもの様子を見てるので養育者は普段とどのくらい違う反応をしているかがわかります。子どもたちは限られた手段で動揺を表現します。昨日と今日でできることや反応が変わることもあります。大人なるとすぐに泣くことはネガティブなことのように言われてしましますが泣かない赤ちゃんのことを養育者は心配します。泣いていなくても何が起っていないか、泣けない理由があるのかを考えます。確かに泣いているときは子どもたちにとって快適な状況ではありません。しかし驚きや混乱を表現することは違いを感じられるようになったということです。保護者は泣くことは拒絶されていると感じていましたが自分にだけしていることを知り、特別に意識されていることを知りました。



コロナ禍で居室での面会ができなくなりました。養育者がほとんど保護者に会うことがない時もありました。0歳児が居室と面会室を行き来して交流を始めました。お家へ帰る段階も感染対策と共に進めます。

いつもならできる外出や外泊を積み重ねることが難しくなりました。練習不足で周囲が心配をしているとき、ある養育者がいました。「課題があるとは思うけどこの子は来た時から本当に素晴らしい(反応がよい)からきっと保護者も本来素晴らしい人に違いない。」養育者は子どもに先に出会うことがあります。言葉を獲得する以前の子どもの様子からそれまでの生活を想像し、何を求めているか反応を見ながら試行錯誤をして日常を繋いでいきます。安全、健康が優先ですが正しいやり方よりも本人にとっての「いつも通り」を取り入れることが安心に繋がります。観察によってどうされていたのかを探っていくなければならないことがあります。早い方がいいことではありませんがこの場合、大人に分かりやすい表現ができる人でした。子どもの様子から大人を信頼できるのは相互関係で子どもが成長することを感じているからこそその発想だと思います。

乳児院を利用するということ

乳児院と聞いただけで悲しく、かわいそうと感じられる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。その多くが戦後の孤児を保護することから始まりました。現在は多くの子どもたちが保護者と交流をしながら生活をしています。環境や病気、関りなどの改善を見童相談所と確認しながら家庭に戻る時期を検討していきます。お預かりは措置制度ですので方針の決定は乳児院ではできません。

子どもは当然保護の必要な存在ですが、そのためには周りの大人の健康なエネルギーが必要です。保護者が安全のために一旦離れて暮らすことを選択することは、辛いものです。自分の意志で来る子どもは一人もいません。保護者も出来れば私たちと出会いたくなかったはずですが、乳児院に預けることは、親として失格のような印象を持たれるかもしれませんが、私たちはそう思いません。預ける決断ができるということはそれだけ子どものことを優先して考えられているとも思っています。

大人が自分の時間を取り戻しながら子供の成長を共有し、再び一緒に暮らすことについて考えていきたいと思っています。子どもも大人も一人では生きていけません。保護者を大切にすることが子どもを大切にすることに繋がっています。子どもの成長は早く、期間も様々ですが、子どもに向かうエネルギーを獲得してもらうためにはどうしたらいいか日々考えています。

家庭支援専門相談員

子どもたちの声に囲まれて

「よーい、どん!」「わーわー!きゃーきゃー!」

今日も子どもたちの元気な声と駆け回る音が響いています。

コロナウイルス感染予防の観点から、子どもたちに直接接する機会を控えており残念に思っていますが、状況が変わり触れ合える日が来ることを楽しみにしています。

今年3月、院長を仰せつかり、早いもので4か月が過ぎました。これまで約40年間、児童福祉行政の仕事をさせていただき、その4分の1にあたる約10年、児童福祉施設の事務職員として施設の運営に携わってまいりました。

この度、その前身を含め130年の歴史ある慶福育児会麻布乳児院に勤務することができ、喜びを感じるとともに、その責任の大きさに身の引き締まる思いであります。

子どもたちが笑顔で安全安心な生活を送れるようにするのはもちろんですが、その子どもたちを養育する職員が笑顔で気持ちよく働ける職場環境を提供するためにどうすれば良いのかを常に考えてまいります。

麻布乳児院を支えてくださっている関係者の皆様にご感謝申し上げますとともに、引き続きご支援ご協力いただきますようお願いいたします。



院長 押切 宣裕

ボランティアの皆さま、いつもありがとうございます!

ボランティアの経緯を教えてください

上村さん：東日本大震災の時、何かしてあげたいと思ったものの、何も出来なかった自分がいました。そんな自分に悲しく、悔しく、切なく、憤りすら感じました。時が過ぎ、自分とまた向き合える様になった時、自分に出来るボランティアをしたい!今からでも遅くない、人の為にお役に立ちたい!それが始まりです。

ヘアカットの際、何か心掛けて下さっていることはありますか?

上村さん：子ども達に寄り添い、お母さんの気持ち、お父さんの気持ちになり、話し掛ける事、そして笑顔でいるようにしています。
中矢野さん：子ども達に楽しみにしてもらるように、子ども達に人と接する事が楽しいと思ってもらえるように心掛けています。美容の技術でたくさんの方の笑顔を作って、僕達がカットした子ども達が大きくなって美容師に興味をもってくれると嬉しいです。



中

上村さん



子どもたちの為にヘアカットを下さっている、恵比寿の美容室 TROUVER の上村隆広さん、恵比寿の美容室 PALETA の中矢野秀明さんです!

第2号は、ある子どもの生後1か月の足型と3歳になったときの足型を表紙に始めました。生まれたばかりの小さな足は、やがて歩けるようになり、走れるようになります。大地を踏みしめる足。これからの歩みも応援しているよ!

そして創刊号に続いて「子どもの声」から始まり、特集ページには『養育者の視点から気づくこと』を掲載しました。この記事は、乳児院で働くなかで知った乳児院の特徴が記されています。逆に言うと、乳児院で働いてみないと気が付かない視点でもあります。子どもに生(なま)で触れている大人(保護者、乳児院の養育者)がつながることの意味を、そしてどのようにつながることが子どもの力になるのか、皆さんと一緒に考える機会になるのではないかと思います。保育園や幼稚園、子育て支援機関などの通所施設と少し異なる、乳児院の雰囲気を感じただけならうれしく思います。また次号に向けて、ご意見、ご感想、取り上げたいテーマなどありましたら是非お寄せください。引き続き、編集委員一同がんばります!(仲井)



編集後記

